海　女　の　信　仰

「答志島を中心として」

答志島　美多羅志神社・八幡神社宮司
伊勢民俗学会・日本民俗学会会員
橋　本　好　史

Ⅰ、海女の普段の信仰

一、神棚拝み

・毎朝、御飯や洗米、塩などを夷貝にもって、神棚に供えて漁の無事や家内安全、大漁を祈る。正月や神祭の日には、あずき御飯を供える。

・仏壇には、御飯とお茶を供える。

・仏壇と神棚両方拝み、祷る。

(神棚に供える夷貝)

・唱える言葉

「えびす・だいこくさん、大漁さってーなー、まぶってくださいやー、めしくわさいやー」(81歳海女)

「龍神さん、稲荷さん、八幡さん、各々の神さん、今日は安全に海女作業させてくださやー」(79歳海女)

「今日も1日、家中、親戚中、皆なっともなしにまぶってたんもいやー、おいもなっともなく入らってたんもいやー」(71歳海女)

「先祖さん、えべっさん、大黒さん、他の神々さん、今日も一日みんなをまぶってくださいやー」(80歳海女)

・夷貝について

・夷貝は、鮑の種類(突然変異したもの)であるが、穴が3つしかあいてなくて、形も少しちがう。鮑と一緒にいて、味も鮑と変わらない。

・夷貝はめったに獲れない。
40年以上海女していて、4個しか獲ったことがない。(71歳海女)

・夷貝のない家は、ふくだめ(トコブシ)にご飯を盛って供える。

・夷貝の表側

・夷貝の裏側

・夷貝(左)と鮑(右)の比較

・夷貝を二段に供える

・神棚の二段重でのお供え

・神棚の三段重ねの御供え

・ふくだめ(トコブシ)貝でのお供え

・ふくだめ貝(裏)

・夷貝とふくだめ貝

二、海女漁があるときの信仰の習慣

・必ず神棚・仏壇(線香あげて)を拝んで一日の無事・海女漁の無事を祈ってから家を出る。
・舟に乗るときは、必ずとりかじ側(船の左側)から乗る。
・出港するときは、八幡さんを拝む。
「龍神さん、稲荷さん、八幡さん、今日も悪事災難逃れて漁をお授け下さい。ほくほく顔で返らせてください。
帰港するときも「ありがとうございました」と八幡さんを拝む。
(80歳海女)
・潜る前には洗米して、潮をなめてから海に入る。
・海に入る前には、軽く船端をたたいて、「ツイヤ」とか「ツイツイ」と唱える。
・ウエットスーツの帽子に漁の安全を祈ってドーマン・セーマンの呪符を書いている。

・ウェットスーツのドーマン・セーマン

※「ツイヤ」と「ツイツイ」について

・唱えるのは70～60代以上で、60代以下はしていない。

・昔お母さんたちがしていたのを見習ってしている。意味はわからないが、たぶん無事を祈る言葉だとおもう。

・和歌森太郎氏の『歴史研究と民俗学』の「古代の志摩と海」 によれば、「ツイヤ両宮サン、ツウヤホウベッサン(おえびすさんとのことだろう)」とのこと。

・田辺悟氏の『海浜生活の歴史と民俗』の「アマ漁⑫信仰」では、「真鶴では龍宮さんの信仰が篤く、海士が潜るときは『ツイヨ龍宮さん』といってオオノミで船ばたをたたいてから潜る者が多かった」とある。
・石川県立郷土資料館編の『海士町・舳倉島』(日本民俗文化史料集成①『海女と海士』より)の「第四章信仰と年中行事」の「五俗信　呪法」に「海女が海にもぐるとき、舟のホテ(側)をオービガネで何度もたたく。これをカネウチと称し海の魔物が逃げ出すといわれた。その音が竜宮に届くようにたたき「エベス様、エベス様」ととなえてドボンと入ったという(木村いよ氏伝承)。

・昔は、生理の時でも妊娠していても潜っていた。(70歳以上の海女)、若い海女たちは、妊娠していたら潜りにいかない。生理の時は体調によって行かないときもある。
・海女漁の開禁前には、海女達は6月中旬ごろ、ほとんどが青峯山正福寺にお詣りに行く。火場(海女小屋)の仲間同士5～6人ずつ都合の良い日・日柄がよい日に行く。また、漁期が終って、冬なまこ漁が始まる前の11月にもお礼となまこ漁の安全を祈りお詣りに行く。なまこ漁が終わった1月15日以後にもお礼参りに行く。年間3回お詣りに行く。ウエットスーツや帽子などに朱印を押してもらい、祈祷の場で祭壇に供えてもらう。

・旧１月１８日の正福寺の御船祭にも答志の漁師はたくさんお詣りに　行くが、漁師としてお詣りに行く。夫婦船の安全を祈祷してもらう。
・都合で行けない人や若い海女達は、祈祷料とウエットスーツの帽子を預けて、それに朱印を押してもらうようにしている。
・御供の米は、海女安全祈願祭でもらってきた米と混ぜて、白紙に小分けして、神棚に供えておき、漁に出るときに持っていき、潜る前に撒く。ペンダントのお守りは、紐を通して一年中首にかけている。
・昔は、小築海さんの磯には忌廻りの人は潜りに行けなかったが、今は関係なく潜りに行っている。海女の口は、夏は答志で葬式がある日には開けない。冬のなまこ漁のときは親類以外の人は潜る。葬式を出した家は初七日か四十九日済んだら潜る(家によってちがう)。

※71歳の海女の話
・7月１５日と7月２１日は、市上がりの日といって、どんなに天候や潮の加減がよくても海女漁の口は開けない。
・7月１５日は、月のかけあわせが悪いと言って昔からあけない。日が悪いと言われている。昔、大きな海難事故があった日かもしれない。
・7月２１日は、鮫が伊勢神宮にお詣りに来る日なので、開けないと言われている。
・この市上がりの日に潜ると白眼(まなこ)の子が生まれると言い伝えられているが、若い時にこの日に潜りに行き、午前中で６０個の鮑を獲り、午後も30個の鮑を獲ったことがあったが、子供たちは4人生んだが、普通に生まれてきて、ほっとした覚えがある。

・答志の漁師たちの祈祷札

Ⅱ、青峰山正福寺への信仰

・鳥羽市の標高336mの真言宗の古刹で、本尊は十一面観音で、50年に一度開帳の秘仏である。鳥羽相差の海から鯨の背に乗って顕現し、この山に登ったと伝えられている。

・聖武天皇が東大寺建立の際、不祥事が度々あり、なかなか建立できなかったとき、「天朗峰(あおのみね)に霊験あらたかな観世音菩薩遊化の山あり、この地に一伽藍を建立し尊像を安置すればすみやかに諸願成就すべし」との夢のお告げがあり、直ちに行基を遣わして伽藍を建立したところ、東大寺が完成したとのこと。その後、平城天皇の綸旨を受け、弘法大師が真言宗に改宗された。

・海難に御利益があるとのことで、全国の海運業者や漁師の信仰だけでなく、鳥羽志摩の海女達の信仰も篤い。

・正福寺の大門

的矢の大工中村九造が30年の歳月をかけて天保13年(1842)に完成させた。

青峯山大門　海抜336米雲青く気澄める東海の天に聳える

・正福寺の金堂

・正福寺の大祭
　一御船祭
　　(旧1月18日)

・全国から海運業者や漁師のお詣りがあり、賑わう。
・鳥羽志摩の海女のお詣りも多い。
・答志の漁師や海女達も30人～50人ぐらいお詣りにくる。護摩祈祷してお札を上げる人も多い。

・正福寺の住職や奥さんの話

・鳥羽志摩の海女漁しているほとんどの町の海女達はお詣りに来る。御船祭以外に六月・七月など海女漁が始まる前に団体で町ごとに日をずらせてくる。
・石鏡の海女達は、年間三回団体でお詣りに来る。12月28日には、お礼詣りにくる。2月28日には護摩祈祷したあと、食事会をする。7月10日は、カラオケしたり、踊ったりする。
・お守りや日本手ぬぐいなどをよく買っていく。ペンダントのお守りは、潜るときに身につけると聞いている。ウエットスーツの帽子に朱印を押していく。
・御供の米は、長持ちするように寺で蒸して天日干ししたものを祈祷した人たちに授与する。授与された御供の米は、御飯を炊くときに、一緒に入れて、炊いていただくとのこと。

・石鏡海女組合の祈祷札と朱印

・ウエットスーツの帽子の青峯山正福寺の朱印

・正福寺の日本手ぬぐい

・正福寺のお守り

・正福寺の御供の米

・大坂西宮樽廻船問屋奉納の大燈籠

天保8年(1837)奉納

・昔の参拝者の姿と絵馬や札

・志摩市志摩町和具の海女達の話

・和具の海女達６人が８月１日(旧暦６月２５日)にお詣りに来ていて、話を聞く。年長者は７９歳とのこと。

・今日は、ゴサイ(御祭)の日であるので、日待ちで海女漁が休みでお詣りに来たとのこと。昔は伊雑宮にもお詣りした。毎月お詣りに来るとのこと。

・ゴサイの日とは、旧暦6月25日・26日で、この日は磯部の伊勢神宮別宮の伊雑宮の大祭の日(現在は、毎年6月24日)で、竜宮の使いの七本鮫が伊雑宮にお詣りに来る日で、26日は「もどりゴサイ」で鮫が帰っていく日で鳥羽志摩のほとんどの町の海女漁は休みとなる。
・海女漁に行ったときに、海に入ってすぐに浮のわっぱに差してあったイソモノオコシを引き抜いて、わっぱを2～3回漁の安全を祈って叩く。「ツイツイ」などとは言わない。
・初めて鮑を獲ったときも、その鮑をイソモノオコシで2～3回続いて漁があるように祈って叩く。

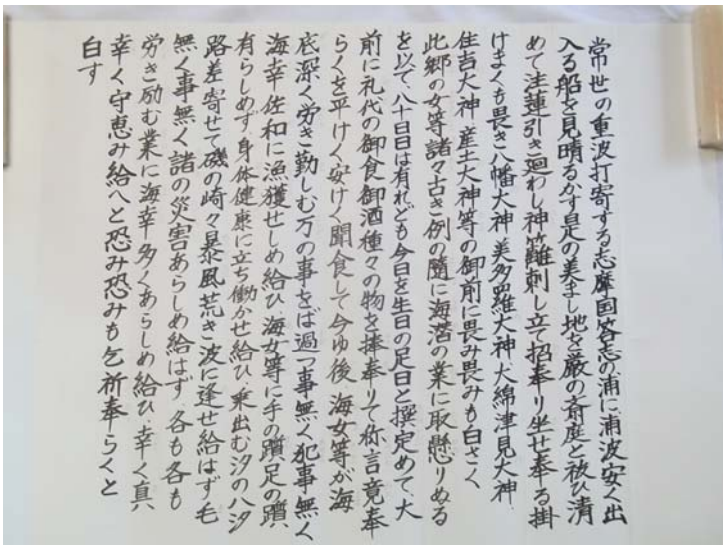
Ⅲ、海女漁の祭典

一、海女漁安全祈願祭

・平成21年(2009)6月より毎年始める。それ以前に2年連続で高齢の海女が潜っていて、心臓麻痺などで亡くなる事故があり、答志漁協より依頼があって始まる。
・6月中旬の漁の休みの日に海女漁が始まる前に斎行する。漁協の市場に神籬を組んで海女や船頭・漁協の理事たちが参列。

・大祓詞奏上

・海女漁安全祈願祭の祝詞



常世の重波打寄する志摩国答志の浦に浦波安く出
入る船を見晴るかす是の美しき地を厳の奇度と祓ひ清
めて注連引き廻わし神籬刺し立て招奉り坐せ奉る掛
けまくも畏き八幡大神 美多賀雖大神 大綿津見大神
住吉大神 産土大神等の御前に畏み畏みも白さく
此郷の女等諸々古き例の隨に海潜の業に取懸りぬる
を以て、八十日は有れども今日を生日の足日と撰定めて大
前に礼代の御食御酒種々の物を捧奉りて称言竟奉
らくを平けく安けく聞食して今ゆ後 海女等が海
底深く労き勤しむ万の事をば過つ事無く犯事無く
海幸佐和に漁獲せしめ給ひ 海女等に手の躓足の躓
有らしめず 身体健康に立ち働かせ給ひ 乗出む汐の八汐
路差寄せて磯の崎々暴風荒き波に逢せ給はず毛
無く事無く諸の災害あらしめ給はず 各も各も
労き励む業に海幸多くあらしめ給ひ 幸く真
幸く守恵み給へと恐み恐みも乞祈奉らくと
白す

・海の祓い

・玉串奉奠

海士や船頭、漁協理事たちも玉串奉奠

- 二、小築海祭

・答志島の東の前にある無人島で昔より小築海神 (正式には不詳一座と届けているが、白髭大明神と伝承されている)を祀っている社があった。『三国地　誌』に「小築海明神祠」とあり、『志陽略記』には、「小築明神社同村小築海にあり、何れの神を祭るか知らず、又白髭明神社あり、其外石権現あり、社は廃失す」とある。明治42年旧2月7日に大築海神などと共に八幡神社に合祀された。島には今でも社跡が残っている。棟札も元禄から明治まで10枚が残っている。

・明治の合祀令の時に1村1神社命令されたが、古来より答志の漁師・海女たちにたいへん信仰の篤い神で、大築海神や八幡神とともに漁神さんとして、八幡神社として残された。

・白髭明神社元禄１５年(1702)の棟札の表と裏

・小築海神社文化２年(1805)の棟札の表と裏

- 小築海神社文久２年(1862)の棟札の表と裏

・例大祭は、昔は旧暦６月１１日であったが、新暦では7月１１日に斎行していた。しかし、現在は天候や波・潮の状態でその前後の日に決めている。
・例大祭の日には、禁漁区であった島の周りの磯の海女漁を開禁する。天候がそろわなかったり、鮫騒動のあった年には、開けなかったこともある。
・昔は、ふだん潜らない人まで、村中が潜りに行った。子供でもアワビやサザエが獲れた。
・現在は、潮の加減で時間が変わるが、組合の船の旗を上げるのを合図に2時間開けている。祭主は大祓詞を唱え、組合運営委員長や理事が洗米と神酒を海に撒きながら、海女漁の安全と大漁を祈りながら、島を一周する。その後、祭主が海を祓う。

・小築海島の掲載されている古地図(嘉永２年)

・答志島古地図２

・答志島の地図

・小築海島　海岸線長0．312km

・小築海島空中写真1983年国土交通省

・出漁する海女船1

・出漁する海女船2

・出漁する海女船3

・出漁する海女船4

・開禁の合図の旗と大祓詞の奏上

・神酒と洗米の種まき

・海の祓い

・島の周りの海女船

・海女船(舟人海女)

・漁協の役員たちが、小築海島に上陸して、島に生えている茅と桑を刈り取ってくる。この茅と桑を漁が終わった後に八幡神社にお礼詣りに来る海女達に授ける。この茅と桑には、小築海神の神霊が籠っているので、家の玄関や船に飾っておくとこれからの漁の安全・家内安全、大漁の御利益があると信じられている。(桑は足りないので、総代が別の場所でも採る)
・お礼詣りには、小築海島の漁で獲れた鮑や栄螺を御供えしてお詣りする。昔は、献饌台に乗りきれないくらいの御供えがあったが、現在は賽銭が多くなってきた。
・八幡神社は約100段の石段を登る岬の上にあるので、年寄の海女や疲れ切っている海女は、賽銭を預けてお詣りに来る人に茅や桑を預かってきてもらうようにしている。

・小築海島の茅・桑の刈り取り

・茅・桑の積み込み

ME3-57381

・小築海祭の祭典は、茅と桑の刈り取りが終わり、神饌用の鮑7個が獲れたら、港に戻って祭典の準備をして八幡神社にいく。漁協の理事役員たち１１人で斎行する。
・神饌は、洗米・神酒・鮑の三台で、小祭であるので御扉開扉はしない。献饌は組合理事二人に手伝ってもらう。
・祭典終了後、漁協の理事・役員は、漁の終わりの合図をしに島の周りに戻り、その後港に帰ってくる海女船を、寸足らずの鮑などを獲ってないかなど調べる。
・神職や総代で茅と桑を切り揃えておく。

・神饌用に獲られた鮑(7個)

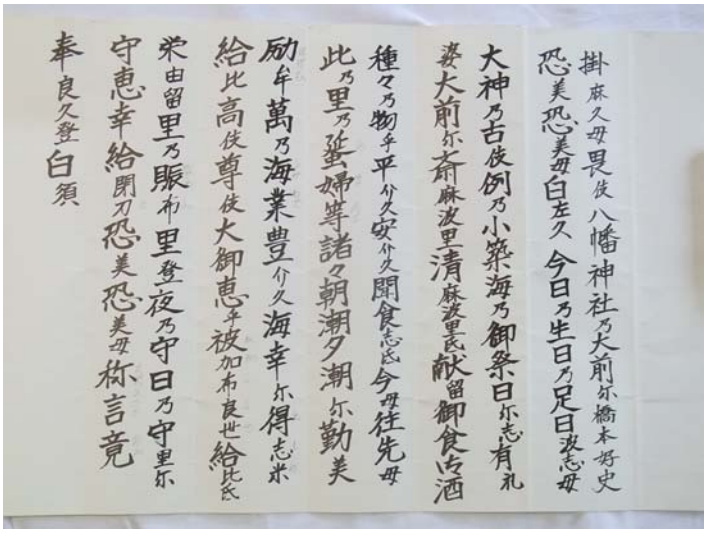
・神饌として準備された鮑

・八幡神社での小築海祭の祭典の様子

・神前に供えられた鮑

・祭主の祝詞奏上

・小築海祭の祝詞



掛麻久母畏伎八幡神社乃大前尓橋本好史
恐美恐美母白左久 今日乃生日乃足日波志母
大神乃古伎例乃小築海乃御祭日尓志有礼
婆大前尓斎麻波里清麻波里民献留御食与酒
種々乃物乎平介久安介久聞食志民今母往先母
此乃里乃蜑婦等諸々朝潮夕潮尓勤美
励牟萬乃海業豊介久海幸尓得志米
給比高伎尊伎大御恵乎被加布良世給比民
栄由留里乃賑布里登夜乃守日乃守里尓
守恵幸給閉刀恐美恐美母称言竟
奉良久登白須

・理事たちの玉串奉奠

・八幡神社に次々にお詣りに来る海女

・小築海島で獲れたサザエなどを供える海女

・神前でお詣りする海女

奉
伊勢神宮式年遷宮

・祭主が茅と桑を海女に授ける

・茅と桑を授かった海女

・家の玄関に飾られた茅と桑

・船に飾られた茅や桑

三、その他の海女漁の祭

・毎年、６月中旬の天候・波・潮の好い日に小築海島以外の磯の初磯祭を斎行する。祭りのやり方は、小築海祭と同じで、開禁の合図の旗を八幡岬の沖で上げた後、大祓詞唱え、神酒・洗米を撒きながら大築海島を一周する。

　その後神饌用の鮑が獲れたら、八幡神社へ行き、祭典を斎行する。

・海女達は正月や神事・節分には、海岸に出て、御飯・膾・お神酒などを龍神さんなどの海の神に供えて祈る。

・答志島・和具浦の浜詣り

Ⅱ、鳥羽市の他の特殊な海女信仰

・鳥羽市相差町堅子の「洗米石」信仰

・海女漁の初磯(開禁)の日に海女達が、洗米石の穴に潮で清めた白米と小豆を入れ、魚、野菜、神酒を供え、「海女漁の安全と大漁」を祈願している。平成24年は6月15日に開催し、5人の海女たち(専業海女ではない)が洗米石に祈った後、米と酒を海に捧げた。

・この洗米石は、前の洗米石が堤防を工事の為、壊されてしまったので、平成12年に新たに造られた3代目である。前の洗米石は、穴の残っている部分だけ寺の境内の隅に置かれている。

・的矢湾沿いの堅子は江戸時代には海運業の盛んであった。船主の奥さんが、この洗米石の穴に同じように洗米などを供えて、航海の無事を祈ったとのことである。
・この洗米石の穴は、全国で見つかっている盃状穴の一種で、生産と豊穣、再生を願って穿たれた民間信仰の対象とされてきたものであろう。
・穴は海女達が身につける護符のセーマンの五芒星の頂点に穿たれたものと思われる。

・洗米石の穴に米と小豆を入れて準備

・海女漁初磯祭を斎行しているところ

・海に洗米と神酒を捧げているところ

・古い洗米石

・新しい洗米石